

ダークな乙女ゲーム世界で命を狙われています3

イベント1 護身

早咲きの桜の花びらがハラハラと舞う、三月某日。本日はあたしが通う裏戸学園うらとの卒業式だ。式後の正門前は卒業生との別れを惜しむ在校生で混み合っている。あたしはそれを感慨深く教室から見下ろしていた。本来、高校二年生のあたしは見送る立場なのだが、気持ちとしては卒業生に近い。

そう、あたしは今日を最後にゲーム期間という長い苦難から卒業するのだ。

思い起こせば四月。転校生である聖利音ひじりおんを見た瞬間、この世界が彼女を主人公とする乙女ゲーム『吸血鬼十ホリック』の世界だと気が付いた。あたしの通う裏戸学園はそのゲームの舞台で、聖さんの攻略対象である生徒会『月下騎士会』のメンバーは全員が吸血鬼。あたしこと多岐環たきたまきは主人公のルームメイトで、ゲームパッケージのあらすじによると死亡する予定のモブキャラクターだった。それらを思い出した時には、世界を呪いたくなくなったものだ。

あたしは、死亡フラグを回避しようと頑張った。

最初は、やたらと懐いてくる聖さんに振り回され、望んでもいないのに月下騎士たちと知り合う羽目に……

一学期の途中、生徒会メンバーの黄土翔瑠・統瑠兄弟の誘拐事件に巻き込まれ、本気で死にかけたりもした。ちなみに誘拐犯の正体は吸血鬼ハンター。ハンターと対決した生徒会長・蒼矢透が力を暴走させ、本当に大変だった。その時、会長に思いっきり噛み付かれて怖かったっけ。

よく生き残ったものだと、今になっても思う。

そういえば、その時にあたしを助けてくれた自称『神様』。

魔法みたいに怪我を治したり、一瞬で遠くの寮まで移動させてくれたり——

結局あの後一度も接触がなかったけど、あれは何者だったのだろう。

もしかして本当に神様だったのだろうか。吸血鬼がいるくらいだから、神様がいてもおかしくないのかもしれない。

ま、なんにしても、全ては過去のことだ。

誘拐事件を最後に大きなイベントは起きず、二学期になると聖さんはゲームのシナリオ通り、月下騎士の親衛隊だけが住める天空寮に転寮していった。

その途端、あたしはゲーム関係者と疎遠になり、ゲーム最終日の今日を無事に迎えることができたのである。

……って、こんな所でのんびりしている場合じゃなかった。

教室を出て、あたしは裏門に向かう。金持ち学校によくあるやたら豪華なアーチ状の正門とは違い、辿り着いた裏門はシンプルな黒い格子戸だ。その門の左右には桜が植えられており、ちょうど綺麗に咲いていた。

卒業生の見送りは正門で行われるので、裏門には人影もなくひっそりとしている。

なぜ、そんな場所に来たのかといえば、ここでゲーム最後にして最大のイベントが起こるからだ。

イベント名は『エンディング』。

『吸血鬼＋ホリック』という乙女ゲームには、各攻略対象との恋愛エンディングが三種類用意されている。——攻略対象の心の闇を晴らし、その人物にまつわる謎を全て解明できれば、主人公が告白されて恋人同士になるベストエンド。謎は残ったままだが好感度が高ければ、主人公のほうから告白して恋人同士になるハッピーエンド。好感度が足りず、友達のまま終わるノーマルエンド。ここまでくればもう誰も死ぬことはない。だから安心して見ていられる。

さて、聖さんは一体誰とのエンディングを迎えるのだろう。

実はあたし、聖さんが誰のルートに進んだのか知らないんだよね。

ルームメイトじゃなくなったら聖さんと会話する機会も減ってしまい、彼女の動向はほとんどつかめなくなってしまったのだ。誰それとデートをしたとかいう噂は聞いていたけど、どこまで本当かわからない。

そんなことを考えていたら、鐘の音が聞こえた。

時計を確認すると、そろそろだ。あたしは見つかからないよう、近くの建物の陰に隠れた。

うう、なんだか他人ごとながらドキドキしてくる。

裏門にばかり気を取られていたあたしは、背後から近づいてくる人物に気付かなかった。

そして——

「多岐さん」

突然肩を叩かれ、あたしは飛び上がった。

慌てて振り返ると、平戸琢磨委員長がいる。

彼は主人公の攻略対象の中で唯一の人間。吸血鬼と対立する吸血鬼ハンターという設定の人物だ。まさか彼が聖さんの相手だったのだろうか？

だが、どうも違和感を覚える……

三月なのに委員長はなぜか夏服だし、その奥に見える背景もいつの間にか教室に変わっていて、空気が蒸し暑い。

わけがわからなくなつてうつむくと、机の上に広げられたスケジュール帳が見えた。

六月のカレンダーには、月の半ばまでバツ印が付けられている。すぎた日付に自分が印を付けていたことを思い出した瞬間、あたしは脱力してしまった。

「ゆ、夢？」

手帳が示す日付は、例の誘拐事件から二週間も経っていない。ゲームの終了日ははるか先だ。

「あの、多岐さん。大丈夫？」

「……ええ、まあ」

全然大丈夫ではないが、委員長が悪いわけではない。

のろのろと頭を上げれば、傾きつつある太陽に照らされた教室が見えた。

先日から体調不良が続いていて、休むほどではなくなったとはいえ、まだ身体がだるい。

今日もホームルームの後、しんどくなったあたしは少し休んでから帰ることにしたのだが——いつの間にか眠ってしまったらしい。

周囲を見回すと、他に人はおらず、委員長とあたしだけだった。

「あの、何か御用ですか？」

「用事はないんだけど、机に突っ伏してるから具合でも悪いのかと思って」

心配そうにこちらを覗きこんでくる委員長を、意外に思う。

ハンターである委員長が裏戸学園に入学したのは、学園内に吸血鬼がいるという情報を掴んだからだ。彼がクラス委員をやっている目的は、委員会や教師などと繋がりをつくり、吸血鬼に関する情報を集めやすくするためだったはず。もともとリーダー気質なので責任感は強いけど、性格はおおらかというか大雑把。

ゲームでは、聖さんの体調不良に彼女が倒れるまで気付かないなんてエピソードもあるくらいなのに、ただのクラスメイトでしかないあたしを心配するのはなぜだろう……

……あ。

「どうしたの？　なんか顔色がさらに悪く……」

委員長は気遣わしげな顔をするが、あたしはそれどころではない。

委員長の顔を見ていたら、重大なことを思い出したのだ。

あたしは慌ててスケジュール帳をしまい、鞆を持ち上げる。

「本当に大丈夫です。あたし、ちよつと用事を思い出したんで、帰りますね」
委員長から逃げるように教室を出ようとした瞬間、腕を掴まれた。

「ちよつと待って。僕も帰るから一緒に帰ろう」

え、なんで？ 意味がわからず眉をひそめると、委員長が言い訳するように言った。

「柵橋先生に頼まれたんだよ。多岐さん、病み上がりだから気をつけてやってってくれって」

なるほど。ちなみに柵橋先生というのはうちのクラスの担任だ。何かとあたしを気遣ってくれる先生らしい優しさではあるが、今は非常に迷惑である。

「え、つと。すみません。気持ちは嬉しいんですけど、そこまでしていただく必要は……」

「だから、ついでだよ。どうせ、同じ場所に帰るんだ」

「でも、あたし、少し寄るところがあります……」

「今から？ 明日にしなよ。あんまり顔色良くないし、途中で倒れたら大変だろ」

「体調は大丈夫です。多少だるいだけで、動けないわけじゃないですし……」

「動けなくなつてからじゃ遅いよ。寮にも聖さんがいないんだから、無茶しないほうがいい」

誘拐事件後、一度寮に帰ってきた聖さんだったが、吸血鬼と関わったことで体調に変化がないか再検査すべく入院させられており、まだ寮にも学校にも戻ってきていない。体調はいいらしいので、近いうちに帰つてくると思う。だが、彼女が帰つてきてからでは遅いのだ。

「本当に大丈夫ですって！ 委員長に迷惑をかけるのも申し訳ないですし……」

「僕は別に迷惑だと思つてないし、大丈夫だよ。それとも送られたら困るような、やましいことで

もあるわけ？」

鋭い視線を向けられ、唾を呑み込む。

あれ、なんだろ。なんか委員長の様子がおかしい？

真面目で優しい雰囲気になくなり、纏う空気に不穏なものを感じる。

あたしを見下ろす瞳は冷たく、監視者のように鋭い。

突然ハンターモードになった委員長に、ここ最近の彼との接触を思い返すが、疑われそうなことをした覚えはない。

委員長の豹変に戸惑っていたその時――

「うわあああん！ 平戸、助けて〜〜」

突然、パーンと音がして、教室の扉が開く。

驚いて振り向くと、そこにはクラスメイトの波留間が立っていた。

何かと面倒事を連れてくる人物の登場に思わず身構えるが、彼はあたしを無視して委員長に駆け寄り、問答無用でその腕を掴んだ。

「俺たちには平戸の力が必要なんだ。だから来て！」

「なんだよ、波留間、こんな時間にいきなり。今忙しいんだよ。明日にしろ」

「そんなこと言わずにさ。お願いだよ」

波留間は委員長の腕をグイグイ引っ張って、連れていくこうとする。

しかし、吸血鬼ハンターなんて力勝負な職業に就いているせいか、委員長はびくともしない。

「いいから、来てよ。冷静な第三者の意見が必要なんだ」

「それなら、僕じゃなくていいだろう。僕は多岐さんと……」

「そこでようやくあたしの存在に気付いたのか、波留間はこつちを向いた。」

「多岐さん、平戸になんか用事があるの？」

「え？ いえ、別に」

「じゃ、問題ないね！」

「待て！ 問題ありまくりだ！」

委員長は波留間の手を振り払う。

「僕はこれから、多岐さんを送って帰るんだ。お前に付き合っている暇はない」

「ええ？ 多岐さん、そうなの？」

「え？ いいえ、別に」

「じゃ、問題ないね！」

「いや、だから！」

堂々巡りになりそうな展開に、あたしは溜息を吐いた。

「委員長、ダメですよ。ちゃんと、話くらい聞いてあげないと」

「その間に一人で帰る気だろう」

委員長は責めるような目であたしを見てくるが、当然そのつもりだ。

「クラスメイトの悩みを聞いてあげるのも委員長の仕事ですよ」

「でも、……こんなの、絶対に僕じゃなくても」

「別にあたしは一人でも大丈夫ですし。どう見ても困っているのは波留間君でしょ？」

「そうそう」と首を縦に振っている波留間を委員長が睨む。

不服そうにしながらも委員長が逃げようとしないのは、自分が必要とされていることがわかって
いるからだろう。

それでも決心がつかない様子の委員長に、あたしは止めを差すことにした。

「あたしのお気になさらず。それより、何に対しても『誰がやっても同じ仕事だからと放り
出してはダメ』ですよ」

あたしの言葉に、委員長が目を見開く。

その表情にあたしは満足した。実はこれ、委員長がゲーム中でよく使っていた言葉なんだよね。

自分が使っている言葉を他人に使われたら、人間、反論できないものだ。

思惑通り、苦い顔になった委員長は息を吐いた。

「……五分で戻る。だから、待っててよ」

「……五分なら。でも、早く終わらせたいからって、いい加減な判断しちゃだめですよ」

委員長が眉間のシワを深くしたが、あたしは素知らぬ顔をした。

委員長の性格上、ここまで言えば、どんなバカバカしい案件でも真剣に取り組むだろう。人一倍、
責任感のある人だから、五分で話を終わらせられるわけがない。

『『ベストを尽くせずとも、ベターを目指して』じつくりビッソ』

追い討ちに彼の常套句じょうたうくを使うと、委員長は何か言いたげな顔をした。その顔がなんとなく切なそうに見えて、一瞬「おや？」と思っただが、委員長とはあまり関わりのなかったのであえて聞かなかった。

委員長と波留間が教室を出て五分後。予想通り終わらなかつた話し合いに感謝しつつ、あたしは挨拶代わりあいさつのメモを委員長の机の上に置いて教室を出たのだった。



環と別れた琢磨が波留間に連れて行かれた先では、数名のクラスメイトが揉めていた。揉め事の原因は、来月開かれる球技大会の不参加枠を誰が取るかというもの。

くだらないが、それぞれの言い分を公平に聞くには、それなりに時間がかかる。結局、話し合いが解決するころには、空が藍色あゐに染まるうという時間になっていた。

その後、教室に戻ったものの環の姿はなく——疲れて寮の自室に帰ると、部屋の中はしんと静まり返っていた。やや引きこもり気味のルームメイトがいないのは珍しいが、一人でいたい気分なのでありがたい。

琢磨は鞆かばんを椅子いすに引っかけ、メガネを外してベッドに倒れ込んだ。

寝転んだまま、そっとポケットから一枚のメモを取り出す。

そこには『帰ります。心配してくれてありがとうございます』と書かれている。それは環が琢磨の机に残し

ていったメモだ。簡潔かんけつで律儀りぎな内容から彼女らしさを感じる。

溜息ためいきを吐いて目を閉じると、数日前、とある廃屋で出会った女の姿すがたが蘇よみがえる。

ギルドの調査依頼で訪れた山奥の廃屋で、思いがけず父の友人だった男に再会した。その男に相棒だと紹介された女だ。

女はブルーローズと名乗った。

かつて琢磨の父に命を救われたと語る女は、その礼にと、とんでもない情報を琢磨にもたらした。女曰く、ハンターギルドを運営するのは吸血鬼だという。それが本当ならば、琢磨は組織にずっと騙だまされていたことになる。

ばかばかすぎでとりあう気にもなれなかつたが、女は信じられないなら、いくらでも調べてみればいいとまで言った。自信ありげなその態度に、一瞬ギルドを信じる気持ちが揺れ動いたのは事実だ。

だが、それでも琢磨は調査しようとは思わなかつた。

父が死んだ時、その死を共に悼いたみ、肉親をなくした琢磨に優しくしてくれたギルドの職員。彼らが自分を騙しているなどと、信じたくなかつたのかもしれない。

あるいは、彼女のくれたもう一つの情報を信じたくなかつたからか——

琢磨はベッドから起き上がると、部屋に備え付けられた机の引き出しを開けた。

あまり整理の得意でない琢磨の引き出しには、様々なものが雑然と詰め込まれている。その一番上に、琢磨に似合わないものがしまわれていた。

それは赤いリボンだ。以前、環が作ったカップケーキの入った袋についていたもので、なんとなく捨てられなくて取っておいたのだ。

琢磨は取り出したリボンをメモと重ね合わせながら、ブルーローズの言葉を思い出す。

『あなたのクラスにいる多岐環。あの女には気をつけて。あの女は吸血鬼側の人間』

環が吸血鬼の関係者だという疑いは前からあり、琢磨はここ二ヶ月、彼女の様子をずっと観察してきた。

思い出すのは、食堂の窓から見た料理中の姿。本人は気付いていないと思うが、何度も見ていたのだ。

慣れた手つきで楽しそうに料理を作る様子は、微笑ましい。

何に対しても一所懸命な環は、教室でも何かと目立つ転校生の聖に対して優しく接している。

以前、ルームメイトが環のことを「悪いことをする人間には思えない」と言った気持ちが今ならわかる。

環に対する疑いがやっと晴れてきたところだったのに。なぜ、ブルーローズから環の名を耳にすることになるのか。

環を信じたい気持ちと疑惑の間で揺れていた琢磨は、先ほど、教室でうたた寝をする彼女を見つけた。

実は、見つけた後しばらくの間は彼女を起こせずにいた。

眠る環は本当にあどげなく、やはり彼女が吸血鬼に関わっているなんて信じられないと思った

のだ。

だから、環の口から吸血鬼との関わりを否定してほしくて、思い切って彼女を起こすことにした。一緒に帰る道すがら確認してみようという計画は、環の拒絶で実現しなかったが……

だが、環に確かめなくてよかった、と思う。

冷静に考えれば、本人の言葉は否定の材料にはならない。

環のことを考えると、自然にあの日のカップケーキのことを思い出す。

それは、かつて琢磨の父親が作ってくれたものと同じ味がした。

環と父が知り合っていたとは思えないのに、彼女の言動はなぜか死んだ父親を思い出させる。

放課後の環の言葉もそうだ。

『誰がやっても同じ仕事だからと放り出してはダメ』

『ベストを尽くせずともベターを目指して』

——それは琢磨が父親によく言われた言葉だった。

琢磨は委員長などという役に就いているが、本質的には真面目でも勤勉でもない。すぐに楽をしたがるし、努力も嫌いだ。

あの言葉は父親がそんな彼の本質を叱責する時の決まり文句だったのだ。

あまりに何度も言われたので、自らの口癖にもなってしまった。

どんな危機的な状況でも、あの言葉を呟けば、反射的に身が引き締まり冷静さが戻ってくる。

大きな怪我もなく、吸血鬼ハンターを続けていられるのはそのお陰だ。

父が死んで以来、もう二度と他者の口から聞くことはないと思っていたのに。

——と、その時。琢磨の耳に、ちりり、と鈴が鳴るような小さな音が聞こえた。ちりり。ちりり。

再び聞こえた音の源を辿ると、ベッドの下からのようだ。

琢磨はまさか、と思いつつそこに手を入れ、布に包まれた細長いものを取り出す。

それは、一振りの鞘だ。父の愛刀『鬼斬丸』と共にあったもの。

父の死後、刀と一緒に長い間行方不明になっていたのだが、ブルーローズが琢磨の父に命を救われた証拠だと言って鞘だけよこしてきたのだ。

持ち上げると、微かに震えているのがわかる。

琢磨にはそれがまるで、鞘の武者震いのように感じられ、ゾクリとした。

この鞘に収まっていた鬼斬丸は特殊な刀で、鬼などといった異質な存在に対しては凶悪なまでの切れ味を發揮する一方、人間を切ることはできない。切りつけたとしても、刀が身体をすり抜けてしまうのである。

さらに不思議なことに刀自身が意思を持っており、自ら使い手を選ぶと言われていた。

この鞘も、長い間鬼斬丸と共にあったためか、刀と呼び合い、影響しあうという性質を帯びている。

鞘が鳴ったということは、本体の鬼斬丸に何かあったということだろう。

「……お前の男は主を選んだのか？」

古より刀と鞘は男と女に喩えられる。女側の鞘に語りかけるが、当然ながら鞘は鳴き続けるのみ。

かつて琢磨は、父から鬼斬丸を受け継ぐのは自分であると信じて疑わなかった。

それなのに、新たな主の出現を真っ先に知ることになるとは……

悔しさはあるが、それ以上に不安になった。

父が死んですでに三年。その間、ハンターギルドに捜索を依頼し、自分でも探し続けたにもかかわらず、鬼斬丸の行方はわからなかった。

それが今になって鞘だけが手元に戻り、主の出現を知らせている。

琢磨は己の周囲で、何が起きているかわからない焦燥感に駆られた。

調べなければ。

気付いた時には遅かった、などということにならぬよう——

琢磨は父の死んだ日を思い出す。その朝は、妙な胸騒ぎを覚えたのに、誰にも知らせなかったのだ。結果、父は帰らぬ人となった。

もし父に知らせていれば、何かが変わったのではないか。今でもそう思わずにはいられない。

今回も何もせずに目を背けた場合、同じことの繰り返しになるかもしれない。

だが、いつもなら情報収集を頼んでいる従弟の大翔にだけは頼れないと思った。

危険だということもあるが、彼は環に好意を抱いている。もし彼女が本当に吸血鬼側の人間であつたら優しい従弟が堪えられるとは思えない。

これは琢磨だけで処理するしかないのだ。まだ、環に好意を抱いていない自分が――
思わず握りしめた拳から、クシャリと音がした。

握ったままだったメモを、リボンごとうっかり握りつぶしてしまっただけらしい。

琢磨は、一度鞆たもとを置いて、メモを広げた。

書かれている文字は、綺麗きれいとは言いがたいものの、読みやすく書いていた人物の人柄を思わせる。

琢磨は机の引き出しにそれらを入れ、代わりに名刺大の紙を取り出す。

そこには十一桁の番号が書かれていた。

ブルーローズが話の続きを聞きたくれば連絡しろ、と押し付けていったものだ。

もちろん、ブルーローズを全面的に信じたわけではない。

出会いからして怪しい女だ。唯一信用してもいいと思えるのは、琢磨の父に命を救われたという部分だけか。

亡くなった琢磨の父は伝説級といわれる吸血鬼ハンターであり、多くの吸血鬼を屠ほぶり、また吸血鬼に襲われた人間を救っている。

父の死因は、工作中、吸血鬼に襲われていた少女を庇かばった時に負った怪我けがだと聞いた。

父が助けた少女はいつの間にか消えており、今までどこの誰ともわからなかったが、おそらくブルーローズこそ父が命と引き換えに救った少女だ。

事件後、行方不明になっていた鬼斬丸の鞆たもとを持っていたのだから、間違いないだろう。だが、どうして三年も経たった今、自分に接触してきたのかがわからない。

わからないことだらけだった。自分一人で真実まことに辿り着けるだろうかと不安が募つる。しかし、歩み出すことを決めた琢磨は、そつと携帯電話の通話ボタンを押した。



穴があつたら入りたい。

夕闇の迫る林の中、あたしは一本の木の根元で頭を抱かかえうずくまっていた。

なぜ、そんな場所にいるかといえは……

――多岐環は呪われたようだ。

ゲームのステータス異常みたいに言っても、現実には変わらない。

委員長を待たずに教室を出たあたしだったが、寮には向かわなかった。

実は委員長の顔を見て、思い出したことがあったのだ。

彼は表向き、品行方正な優等生を演じているが、裏では吸血鬼ハンターという中二病丸出しの仕事に就ついている。

ゲームシナリオでは、日常生活や教室で何かと気を使ってくれる委員長に聖ひさんが惹かれていき、明るく前向きな彼女を彼も愛するようになる。ところが二人は、互いが吸血鬼ハンターと吸血鬼の花嫁という対立する立場の人間だと知り、苦悩する――

よくあるロミジュリ展開なわけだ。

そのルートの中で委員長は、とあるアイテムを聖さんから渡される。通常、アイテムは主人公や仲間のキャラクターの助けとなる道具であることが多い。しかし、時には手にすることで不幸になるアイテムも存在する。

委員長が聖さんより渡されるアイテムは、後者だった。

設定資料集に書かれていた、そのアイテムについての項目を思い出す。

鬼斬丸。

攻略対象平戸琢磨の父親（伝説級の吸血鬼ハンター）の形見。日本刀の形をした、最強の対吸血武器。

人間に対して効力はないが、対吸血鬼であれば無類の強さを誇る。

しかし、精神的に未熟であったり、適性のない者が使用すると、刀の力に吞まれて使用者が暴走することになる。

この説明から、おおよその見当はつくと思うが、委員長は適性はあるものの、精神的に未熟な部分があるので鬼斬丸を使うと力に吞まれてしまう。

彼がこの刀を正しく使えるのはルートの終盤でのみ。聖さんを守りたいという強い思いで制御できるようなるといふ、ありがちな展開だ。

初期段階で委員長が鬼斬丸を抜いてしまうと、即バッドエンド。また他の攻略対象のルートでも、

このアイテムが委員長の手に渡ることがある。その場合、刀を手にした委員長が現れて攻略対象と死闘を繰り広げるのだ。一体どこの戦闘系ゲームだと突っ込みたい。

そんな危険な代物をどうして今まで放置していたのかといえば、四月以降あたしには聖さんがべつたり張り付いていて、どうにかする暇がなかったからだ。

……忘れていたという理由のほうが大きいんだけど。

今なら聖さんが学校にいない。鬼斬丸対策をするには絶好の機会だ。

あたしはゲーム知識を総動員して、鬼斬丸の場所を特定した。

それは、学園を囲む林の中。

落ち葉に埋もれ水に濡れた形跡があるのに、錆びた様子がない鬼斬丸。さすが伝説級の武器といつたところか。

しかし、刀を別の場所に運ぶ際、あたしは一つのみスを犯した。

鬼斬丸は使い手を一人に限定する特性がある。使い手の代替わりは行われるが、同時期に使用できるのは一人だけ。

使用者は血判契約と呼ばれるモノで決まり、主のいない鬼斬丸の刀身に血を吸わせることで使い手の登録が行われる。

なのに、あたしはうっかり刀身に血を落としてしまった。

……一応、言い訳はしておく。ちゃんと扱いには注意したんだよ。

抜き身の刃に直に触らないよう、持つ時は鬼斬丸に巻き付いていた布越しに扱ったりしてさ。

そしてあたしは、林の岩場に見つけた小さな横穴にそれを隠そうとした。誰かに見つかったら困るしね。だけどその時、あたしは穴の中のとがった石に手を引っかけてしまったのだ。

ほんの少しの切り傷。そこから血が垂れて、よりにもよって鬼斬丸の上に落ちた。

途端に淡い燐光を発する鬼斬丸——思わずあたしはそれを放り出し、逃げだしてしまった。

そして現在、自分のしでかしたことが怖くなって、林で震えているのである。

あの後、鬼斬丸はどうなったんだろう。怖くて、確認しに行けない。

いやいや、あんな伝説級の武器がモブを主に選ぶわけがないよね。

「刀どころか、カッターを持つてる時ですら震える人間にとり憑くとかありえない」

「何がありえないの？」

突然かけられた声に、ぎよっとして顔を上げると、いつの間にか人が立っていた。

「げ、統溜様」

予想もしてなかった黄土弟との遭遇に、思わずそんな言葉を発すると、相手はぶうつと膨れる。

「げって、失礼だなあ。こんな可愛い僕を捕まえて」

自分で可愛いとかいう男子ってどうなんだろう。そもそも捕まえてない。

文句は多々あるが、誰の目があるとも限らない学内で月下騎士に逆らうのは得策ではない。

あたしはゆっくりと立ち上がった。

「……すみません。いきなりだったもので」

「まあ、いいよ。海より大きな心で許してあげる」

上から目線の言い方にイラッとしたが、「ありがとうございます」と返しておく。

「で、環ちゃん。こんな時間に何をしているの？」

まさか、鬼斬丸のことを言うわけにもいかず、あたしは代わりに別の話をした。

「ええっと、ごめんなさい。こんな時間になって、今何時ですかね？」

「時計、持っていないの？」

「先日、壊してしまっ」

実は、あたしの腕時計は、例の誘拐事件の時に昇天した。

自称神様に寮に戻された時、制服の汚れなどは事件前の状態に戻されていたが、時計は壊れたままだったのだ。

安物とはいえ、一緒に戻してくれたらよかったのに、というのは贅沢か。

「でも、時計持つてなくてもスマホで確認できるでしょう？」

「スマートフォンも携帯電話も持つてませんので」

「は？ 持つてないって、嘘でしょ？」

驚愕する統溜だが、嘘を吐いても意味はない。

「環ちゃんって、前から思ってたけど変な娘だよ。今どき、スマホどころか携帯持つてないとか」

「あの、それより時間は」

「もう六時半すぎてるよ。そろそろ寮に帰らないとまずくない？」

確かに。寮の門限は八時だが、夕食の時間を考えるとかなりまずい。

「あと、この林にはあんまり近づかないほうがいいよ」

「え、なぜ？」

「ここ月影寮の近くなの」

これだけ言えばわかるだろう、といった態度の統溜の言葉に、あたしは血の気が引いた。

月影寮は月下騎士の住む寮だ。一般生徒は、訪問はおろか、その周辺の林にさえ近づくことを禁止されている。その理由はもちろん、人気者の彼らをストーカーから守るためだ。

「ごめんなさい。いつの間にか迷い込んでたみたいで……。すぐに出ていきます」

ストーカーだと思われるのは勘弁、と立ち去ろうとしたあたしの背中に、統溜の声がかかる。

「ちよつと待つてよ」

近づくなと言っておきながら、待てとはどういうことだ。

しかし、無視すると後が面倒なので振り返った。

「なんでしよう？」

「ちよつと環ちゃんに聞きたいことがあるんだ。……月はじめの連休のことは覚えてる？」

突然ふられた話に、ぎくりとする。

月はじめの連休といえば、まさに黄土兄弟誘拐事件のあった時期だ。

あの事件については今まで誰にも事情を聞かれなかったので、完全に無関係を装っていると思っていた。

しかし、統溜は巻き込んだ張本人。あの件にあたしが関わっていたことを知っている。

今さら、何を蒸し返そうとしているのだろう。ドキドキしながら次の言葉を待っていると、統溜はニッコリと笑った。

「僕、あの日、翔溜と利音ちゃんと三人で遊びに出かけたよね？」

統溜の問いかけに、あたしは思わず首を傾げる。

「え？ 三人つて……。あの日はあたしも一緒に」

いましたよね、と口にする前に統溜があたしの言葉を遮った。

「環ちゃん、僕は三人だけで遊びに行った。そうだよね？」

『三人だけ』を強調する統溜の目的はわからないが、彼があたしの件にあたしが関わっていたことを公にしたくないという意図だけは伝わってくる。

あたしにとっても隠しておきたいことなので、頷いた。

「……あの日、遊びに行ったのは統溜様と翔溜様、聖さんだけで、あたしはそれを見送りました」
「そうだったよねえ。環ちゃんは記憶力良いねえ」

うふふ、と笑う統溜に、あたしはいつの間にか止めていた息を吐き出す。

機嫌を損ねずに済んだことに安堵はするが、黒い感情を覚えずにはいられない。

一体なんなんだろう。嫌がるあたしを脅してまで連れていったのに、今はいなかったことにしておけだなんて。随分と虫のいい話だ。

しかし、統溜に反抗してもなんの意味もない。

「話はそれだけですか？ それならあたしはこれで」

そのまま去ろうとした時、再度「ねえ、環ちゃん」と呼び止められた。

今度はなんだ、と振り返ると同時に、突然伸びてきた腕があたしの肩を引き寄せた。頬ほおに、柔らかな何かを感じる。

それが統瑠の唇だとわかった瞬間、あたしの頭は完全に凍りついた。

「いい子な環ちゃんにご褒美だよ」

ニヤニヤと笑う統瑠に、言葉も出ない。

一体なんのつもりなのかと顔をひきつられば、背後でボトリと何かが落ちる音がした。

反射的に振り返る。そこには小柄な黒髪の少女が足元に鞆かばんを取り落とした状態で固まっていた。

「あ、天城さん！」

彼女は黄士兄弟の親衛隊で、統瑠の許嫁いいなすけだ。先ほど統瑠にされたことを彼女に見られてしまうと

は――

「ちよ、これは、別にただのご褒美……っていうか、その変な意味はなくて」

説明しようとするが、逆にどう説明していいかわからず混乱する一方だ。

「あはは、環ちゃん、何言ってるの？ おつかしー！」

大笑いする統瑠に本気で殺意を覚える。

「美香ちゃん、見てた？ 環ちゃんの反応。おもしろーい！」

天城さんに無邪気に抱きつき、大笑いする統瑠。彼の様子に、呆れを通り越して嫌悪感を抱く。

全くなんて男だ、こいつは。

他の女にキスをした直後、許嫁に抱きつくとか。

統瑠は攻略対象の中でも恋愛観がひどく捻ひねくれている。なぜこんな男を乙女ゲームの攻略対象にしたのか。開発者に心から疑問を呈ていしたい。

いやいや、開発者への文句を言っている場合ではなかった。状況はかなり悪い気がする。

天城さんは未だ固まったまま、一言も発しない。

嫉妬爆発までのカウントダウンかと恐怖を感じていたら、天城さんの呟つぶやきが聞こえた。

「統瑠君。環お姉様になんてことを……」

頬に手をあて突っ立ったままという天城さんの反応は、統瑠が期待したものではなかったらしい。

彼は不満げに口をとがらせる。

「何、その反応。つまんなーい」

統瑠はびよんと天城さんから離れ、踵かかとを返した。

「つままない！ 翔瑠を探しに行こつと！」

傍若無人な統瑠の行動に嘩然あざんしていると、統瑠が去り際にくるりと振り返った。

「あ、そうだ。環ちゃん。君が嘘を広めるような娘こだとは思ってないけどさ」

そう言って微笑む統瑠の目は紅い。吸血鬼は能力を発するとき、目の奥に紅い光を宿らせる。どう見ても人間のものではない紅い光に、あたしは身を竦すくめる。そんなあたしの様子に満足したのか、彼は軽快な足取りであたしに近寄り、楽しい内緒話でもするように耳打ちしてきた。

「……事実と異なる話を広めたら、お仕置きしちゃうかもね」

あからさまな脅しに頷くことしかできない。統溜は、今度こそ去っていった。

その背を呆然と見つめていたら、横からおずおずと話しかけられた。

「あの、環お姉様、大丈夫ですか？」

天城さんの心配そうな顔になんだか癒されて、あたしの身体のこわばりは解けていく。

「あ、まあ。大丈夫」

「すみません。統溜君も悪気はない……かどうかはわかりませんが、後で注意しておきますから」
自分のことでもないのに謝る天城さんに、あたしは首を横に振った。

「いや、天城さんに謝られても」

「……すみません。私ごときの頭じゃ、下げても意味ないですよね」

「いや、そういうことじゃなくて……」

「本当に、統溜君つてばなんてことを。……紅原家の花嫁候補に、遊びでも手を出すなんて」

後半はプツプツと声小さくてよく聞こえなかった。天城さんに聞き返したが、彼女は慌てたよ

うに手で口を押さえる。

「いえ、なんでもありません。そういうえば頬、大丈夫ですか？ 気持ち悪いなら消毒しますけど」

天城さんはポケットからハンカチを取り出し、あたしの頬に当ててきた。

いや、一応君の許嫁からのキスだったんだけど、その反応はどうなの……

「ちよつと待ってください。今、消毒液を出して……きゃあ」

天城さんは救急セットらしき白いケースをひっくり返す。

「大丈夫？」

絆創膏などを拾うのを手伝うと、彼女はしょんぼり肩を落とした。

「すみません、環お姉様。私ったらドジで……」

「いや、いいよ。でも、あの……なんで、お姉様？」

呼ばれた瞬間から気になっていたのだが、先ほどは質問できる状況じゃなかった。あたしの疑問に、天城さんはハッと手を止める。

「申し訳ありません、馴れ馴れしくお呼びしてしまって」

多岐先輩、と言いつつ彼女は、見るからに寂しそうに目を伏せた。

なんだか、こちらがいじめているような気分になってしまう。

「いや、別に呼び方くらいで、そこまで恐縮しなくてもいいけど……」

「……では、環お姉様とお呼びしても？」

小動物のように天城さんはこちらを見上げてくる。

う、美少女の上目遣いは反則じゃなからうか。

黄土兄弟の親衛隊である彼女にそんな呼び方をされるのは、できれば勘弁してもらいたい。ただ彼女には以前庇ってもらった恩があるだけに、邪険にしにくい。

「……いいけど」

「本当ですか！」

天城さんの顔が明るくなった。

彼女の笑顔に、なんだかいいことをした気分になる。

その時、遠くから天城さんの名前を呼ぶ声があった。

声のしたほうを見れば、スーツ姿の男性がこちらを見ている。

どこことなく天城さんに似た面差しせんざしの男性だ。彼女の身内かと思うが、そこまで親しくない相手あまり詮索せんさくする気にはなれない。

「あ、いけない。ごめんなさい、環お姉様。ちょっと私、人を待たせてまして」

天城さんはあわただしく救急セットの蓋ふたを開めて立ち上がった。

「いや、別に気にしなくてもいいよ」

「すみません。このお詫わびは後日」

本当に気にしなくていい、と言う間もなく、天城さんは男性のもとに去っていく。

ぽーっと彼女を見送りながら、ふと自分の手に絆創膏ばんそうこうが残っていることに気が付いた。

「え？ あ、天城さん、これ。絆創膏、忘れてる！」

しかし、天城さんにあたしの声は届かなかっただけで、彼女はそのまま男性と共に立ち去ってしまった。

次に会ったら返せばいいか。とりあえずポケットにそれを入れ、辺りを見回す。もうすっかり暗くなっている。

空には星が輝いていた。

あ、そういえば、門限がやばい。

あたしは急いで立ち上がり、寮へと走り出した。

なんとか門限には間に合ったものの、寮まで走ったお陰で、ヘロヘロだ。

自室に着いた時にはもはや電気をつけるのも億劫おちがくで、あたしはそのまま寝てしまおうとベッドに向かう。

しかし、そこで目にした光景にあたしは飛び上がった。

「な、ななな！」

悲鳴を上げなかったのは、自分でも褒めたい。

あたしのベッドの上に刀が転がっていたのだ。

それはどう見ても鬼斬丸だった。

先ほど横穴に埋める際、泥まみれにしたはずだが、ベッドの上の鬼斬丸は汚れ一つない。

その様子はものすごく非現実シュール的だ。

あたしは恐る恐る鬼斬丸に近づき、その柄つかを持ち上げた。

刀身はがねは鋼はがねのようだが、不思議と重さは感じない。せいぜいプラスチック製の模造刀くらいか。

どうしよう、これ。

刀があたしの部屋に現れたということは、あたしがこの刀の契約主あかしになってるってことで確定だ。鬼斬丸はどこに捨てようと埋めようと、主あかしのもとに戻ってくる。

うわー、どうしよう、どうしよう。



バッドエンド直行武器なんていらないよ！

だが、今さら何を言っても意味がない。

鬼斬丸の登録方法はわかってても解除方法は知らないのだ。

あたしは頭を抱えた。

抜き身の刀剣なんて、どうしろと。

吸血鬼以外に害はなくとも、見た目は立派な日本刀。こんなものを隠し持っているとバレたら、銃
刀法違反で捕まってしまう。

「せめて、これが刀じゃなかったら……って、うわ！」

眩いた瞬間、鬼斬丸の刀身が光り出した。

思わず刀を放り出せば、一瞬まぶしいほど大きな光を放って地面に落ちる。

だが、落ちたものは刀ではない。

「……鍵？」

そこには十センチほどの大きさの銀色の鍵が落ちていた。

蔦の絡まったような柄に緑色の石のはまった、アクセサリーみたいな鍵だ。

突然現れた鍵に呆気にとられたものの、その石の色には見覚えがある。

鬼斬丸だ。

鬼斬丸の柄の目貫部分に、同じ色の石がはまっていた。

では、これは鬼斬丸なのだろうか。あの刀が鍵になるなんて設定、ゲームにはなかったけど。

鬼斬丸を想像しながら恐る恐る鍵に触れると、再び鍵が光った。

やがて光は細長く伸びて、刀の形に戻る。

その光景にしばし放心状態になったが、驚くのも疲れてきた。

とりあえず色々実験してみることにする。

結果、鬼斬丸は刀と鍵の二つの形状が取れるとわかった。脳裏にどちらかの形を思い浮かべるか、形が変わるよう命じれば形状が変化するようだ。

あたしは鬼斬丸を鍵にして、刀に巻かれていた布を少し失敬して作った巾着きんちやくに入れた。巾着の紐ひもは長くとり、首にかけられるようにしてある。

あたしは鬼斬丸を持ち歩くことにしたのだ。もちろん、使うためではない。

この部屋は聖さんも使うから、仕方なくだ。彼女があたしの机を漁あさるとは思っていないけど、万に一つも彼女がこれを手にするのではないようにすべきだ。

あたしが持つことによつて、委員長が鬼斬丸を手にする事は避けられるはず。とりあえず年度内は、あたしが鬼斬丸を管理しよう。

そもそも当初の目的は、これを委員長の手に渡らないよう隠してしまうことだった。その目的は達成している。

——そう思わない限り、これが手元にあるという恐怖に堪たえられそうになかった。

部屋のカレンダーを見れば、今日の日付の横に『八十』の文字が見える。

この数字がゼロになった時、聖さんは転寮する。晴れてあたしは、ヒロインのルームメイトとい

う立場を脱し、穏やかな生活を送れるはず。

……死亡フラグ解除までの道のりの長さに気が遠くなり、くらりとした。

思わずその場に座り込み、ぐったりとしてしまう。

とりあえず今は寝よう。あたしは着替えて、今度こそベッドにダイブした。

イベント2 登校と忘却と

「環ちゃん、起きて。朝だよ!」

揺さぶられて目を開ければ、天井を背景にした聖さんが見えた。

「え、まさか寝坊!？」

慌てて飛び起きて時計を確認すると、いつも起きるより早いぐらいの時刻を指している。

「……聖さんが珍しく、早く起きてる?」

思わず時計と聖さんを交互に見て呟く。すでに制服を着ている聖さんは、不満げに頬を膨らませた。

「ひどい、環ちゃん。あたしだって早起きぐらいするよ」

「じゃあ、毎日してよ」

「それは無理かもだけど……」

えへへ、と笑ってごまかす聖さんにあたしは白い目を向ける。

聖さんは朝が弱い。放っておくと遅刻しそうになる彼女を起こすのが、あたしの日課となっていた。

正直、これがかなり面倒。

結構寝汚い聖さんは、なかなか起きない。「あと、五分したら起きる」と言ってギリギリまで

ベッドから離れず、それを引きずり出さなければならぬのだ。

「久しぶりの自室だから、ちよつと早く目が覚めちゃったの」

聖さんの言うとおり、彼女がこの部屋で朝を迎えるのはおおよそ二週間ぶりだ。

黄土兄弟誘拐事件にガッツリ関わったことが吸血鬼側に知られた聖さん。ずっと検査ということ

で入院させられていたんだけど、昨日になって、帰ってきたのだ。

カレンダーを見ると、聖さんの引越しデーまで、残り七十七日。

部屋を眺める聖さんにつられてあたしも視線を巡らせれば、可愛らしい物で溢れた聖さんの机周

りに目をとまる。「聖さん、少しずつでも荷物を片付けておきなよ。二学期には天空寮なんですよ?」

「もう、嫌なことを思い出させないでよ。環ちゃんのいじわる」

「いじわるって……ふわあ……」

一つ大きなあくびが出た。聖さんは目を丸くしている。

「大あくび。なんか、環ちゃんこそ、珍しく眠そうだね」

「ん、ちよつとね」

ベッドから立ち上がり、伸びをするのが、いまいちすっきりしなかった。壁にかけられた姿見に映る自分の顔は、いつもより青白い。

誘拐事件後に寝込んだ後遺症か、未だにだるい日が続いていた。

しかし、一週間も学校を休んでしまったので、これ以上は休めない。

あたしは手早く身支度を整え、聖さんと食堂に向かう。

食堂では数人の生徒が朝食を取っていた。

朝食はバイキング形式で、カウンターに用意されたおかずやご飯、パンを好きなように食べていることになっている。

あたしはご飯と汁物、さらに考えてからほうれん草のおひたしを取って、空いた席についた。いつもよりやや少な目のメニューだが、なんとなく食欲がないので、食べきれるか心配だ。

「ねえねえ、環ちゃん。せっかくだから今日はこのまま一緒に登校しようよ」

洋食中心のメニューを食べていた聖さんが、話しかけてくる。

あたしは、食事をお茶で胃に流しこみながら、しばし考えた。

なんで、今日はわざわざ聞いてくるのだろう。いつもは何も言わなくとも一緒に登校するくせに。嫌な予感はあるが、今まで逃げられた試しなどない。

食事を終えた後、あたしは承諾した。

「別にいいけど……」

「本当？ 嬉しい！ 二人きりだと恥ずかしくって」

ちよつと待て。それはどういう意味だ？

そう思った矢先、突然食堂の入口のほうから悲鳴が聞こえた。

何事かと思って、視線を向けた先にありえない人物が立っている。

「あ、絆先輩だ。お迎えに来てくれたのかな？」

迎えて何、と思っていたら、生徒会副会長の緑水絆が挨拶をしてきた。

「おはようございます。利音」

ゲームならキラキラした効果がつきそうなほど麗しい笑顔に、目が潰れそうだ。

なんで副会長が智星寮に現れるんだ？ こんなこと、ゲームでもなかったのに。

予期せぬ事態に混乱するあたしなど目にも入っていないのだろう。緑水副会長はまっすぐ聖さんに近づいた。

「利音、準備はできてますか？」

「え？ もう、そんな時間ですか？」

「個人的な理由で申し訳ないのですが、授業前に片付けたい仕事があるので……」

「あ、そうなんですわね。すみません。じゃあすぐ、鞆を取ってきますわね」

何やらわかりあっている様子の二人に目を白黒させていたら、聖さんがお盆を持って立ち上がった。あたしも慌てて、それについていく。

さつきから食堂中の視線がこちらに向いているのだ。こんな場所に一人で置いていかれては、たまらない。

登校の準備のため、自室に戻った聖さんにあたしは詰め寄った。

「聖さん、これは一体、どういうこと？」

「絆先輩のこと？」とのんきな様子の聖さんに苛立って思わず叫んでしまう。

「なんで緑水副会長の登校イベントが今、起こってるの!？」

ゲーム『吸血鬼十ホリック』には、朝の登校時にランダムで攻略キャラクターが誘いに来てくれる『登校イベント』なるものが存在する。

だが、これは攻略対象の個別ルートに入らないと発生しないものなのだ。個別ルートに進むのは、聖さんが二期に天空寮てんくうりょうに入ってからのはず。

なのになんで緑水副会長が迎えに来るんだよ!

「は？ 登校イベントって」

不思議そうに首を傾げた聖さんに、うっかりしゃべりすぎたと慌てる。

「あ、いや、それはいいんだけど。なんで副会長が智星寮ちせいりょうに聖さんを迎えに来たのかなって……」

「ああ、それ？ 実は転寮を延期してもらったための条件なんだ」

聖さんが言うには、天空寮に移動になるまでの期間、護衛を兼ねて朝夕、月下騎士たちが送り迎えを行うことになったらしい。

「順番はその時に予定が空いている人ってことで、特に誰って決められてはいないんだけど……って、環ちゃん。どこ行くの？」

鞆かばんを持って逃げようとするあたしの腕を、聖さんが掴つかむ。

「は、離して、聖さん」

「一緒に行く約束したでしょ。ほら遅刻するから、行こう」

あたしは必死で逃げようともがくが、聖さんの手は外はずれない。がっちり腕を掴まれて、部屋から

引きずり出される。

「二人で行けばいいじゃない。絶対、緑水副会長に嫌な顔されるって」

登校イベントは、好感度がかなり高い状態で発生する。

イベントを邪魔した日には、明日の朝日を拝めると思えなかった。

「そんなことないよ。ね、絆先輩」

いつの間にか玄関に着いたようで、血の気が引く。

玄関先では、遠巻きに眺ながめる大勢の生徒を背に、副会長が立っていた。

副会長はまるで周囲を気にする様子はなく、聖さんを不思議そうに見つめ返している。

「なんの話ですか？」

「環ちゃんも一緒に行ってもいいですよね？」

同じく他者の目を気にしないヒロインが、さも当然のように聞くので焦った。

「いや、これは聖さんが勝手に言ってるだけで、お二人の邪魔をするつもりは……」

「構いませんよ」

「へ？」

予想外の答えに目を丸くする。副会長は時計に目をやり、苛いらついた様子で言った。

「聞こえませんでしたか？ 俺は構いません。それより時間が惜しいので、早く行きますよ」

副会長はそう言うなり、背を向けて歩き出す。その姿に呆然としていたら、聖さんに手を握られた。

「あ、絆先輩、待ってください。ほら、環ちゃん。行こ！」

すんなり受け入れられたのが意外すぎて、あたしは聖さんに引つ張られるまま、副会長の後を追う。

だが、二人が人の多い通学路を使おうとしていることに気付いてさすがに止めた。

副会長に睨まれたが、ここは譲れない。この二人は全く気にしていないけど、さつきから周囲の視線がすごいのだ。嫉妬や羨望を含む視線が背中突き刺さっている。

このままでは絶対騒動になる、とあたしは二人を説得して、人の少ない通学路に誘った。誘導したのは林の中の遊歩道。

車も通れる今の通学路ができるまで使われていたもので、学校へも遠回りになるため廃れてしまったらしい。人気がないはずと推測したとおり、人の姿は見えなかった。

あたし、その横に聖さん、数歩離れて副会長——と連なって歩く。

「わあ、綺麗」

林の中の道は、青葉の隙間から落ちる光できらきら輝き、神秘的な風景を作り出していた。その光景に聖さんが感嘆の声を上げる。

「すごい。環ちゃん。よくこんな道知ってたね」

この道を知っていたのは前世のゲーム知識があるからだと言すわけにもいかず、「まあね」と曖昧に返す。

聖さんも追及する気はないらしく、目を輝かせながら風景を楽しんでいた。

「本当に気持ちいい道。こんな場所に來たら学校に行きたくなっちゃうね」

そうかな。あたしは、一日でも多く学校に行きたい。

病欠で結構長く休んだせいで、勉強が追いつかなくなっているのだ。いつそ休みの日も授業をしてほしいくらいだ。

「……今日は平日だよ？ 授業をこれ以上休んだら、進級できないよ」

「え!? あ、そ、そうだね。も、もちろん、わかってるよ」

なぜどもる？

「じゃあさ、環ちゃん。夏休みに海に行かない？」

「え、嫌だよ」

何が「じゃあ」なのかわからないが、なんで夏休みまでヒロインのイベントに付き合わなければならぬのか。

即答するのに、鉄の精神を持つヒロインは諦めない。

「なら、山にしよう。確かに海は肌が焼けるし、潮風でベタベタするから嫌かも」

「いや、そういう問題じゃなくて、外出自体が嫌だと言ってるんだよ」

「まあ、環ちゃんアウトドアってタイプじゃないからね。それなら、室内で遊べるところにしようか」

「いや、だから……」

なんなんだろう。あたしはちゃんと日本語、しゃべってるよね？

なのになんて通じないのだろう。もしわかってやってるのだとしたら悪質極まりないな。聖さんのどこまでも自分本位なポジティブシンキングに絶句する。

「そうだ。せっかくだし他の人も誘おうよ！ 統溜君とか翔溜君とか」

副会長の前で他の男の話をするのはやめて。しかも黄土兄弟とか。

先日誘拐事件を忘れたのだろうか。あ、そういや聖さん、あの時ほとんど意識なかったっけ。

「どうせなら、月下騎士会の人を全員誘いたいかも。二学期から寮を移るし、親睦も兼ねて、ね？」
おそらく聖さんはこれから移動する天空寮と月下騎士たちが暮らす月影寮が隣接するため、こんなことを言い出したのだと思う。

月下騎士全員とか、どんだけ貪欲なんだよ。

大体、そんな集まりなら、あたしが行く必要はなくてもいいか？

「ね、絆先輩。夏休みに親睦会とか、いい考えだと思いませんか？」

え？ 嘘、この話、副会長に振るの？

ゲームでの副会長って、聖さんに対して激アマなんだよね。過去に彼女を《古き日の花嫁》にしてしまった負い目で、どんな願いでも叶えようとするのだ。しかも副会長は、月下騎士会の影の支配者ともいわれるくらい発言力が強い。

俄かに現実味を帯びはじめたイベントの気配に、あたしは慌てた。

「え？ ちょ、聖さん。それはちょっとわがまますぎるよ。絶対無理……」

「……そうですね。無理です」

副会長の同意に、我が耳を疑った。さっきあたしの同行を拒否しなかったことといい、彼はゲームでは考えられない行動を取っている気がする。考えこんでいると、聖さんが不満の声を上げた。

「ええ、なんでですか」

そりゃ、月下騎士の面々は忙しいからだろう。そう思っていたら、副会長は思わぬ言葉を口にした。

「夏休みは寮で過ごし、遠出はしないと約束したはずですよ」

「え？ それって……どういうことですか？」

顔を曇らせる聖さんに、副会長が嘆息する。

「なんとなく、そうではないかと思っていたのですが、やはり忘れてますね。あなたの望み通り、天空寮への移動は延期しました。その条件として夏休みの外出は控えるよう、伝えただけです」

「で、でも、それって絶対出かけちゃダメって話じゃなかったし……」

「親元に数日間帰省する程度なら許可すると言いましたが、遊興目的では許可しかねます」

副会長はあたしをちらりと見た。

「細かい条件を忘れたのなら、後でもう一度説明しますが」

珍しく言葉を濁す副会長に、あたしには聞かれたくない話なのだろうと察する。

しかし、聖さんがそれで納得するはずがない。

「そういう問題じゃないわ！ 一生に一度きりの高校二年の夏休みなんですよ！」

遊びに行けないなんてありえない、と訴える聖さんが、副会長は決して首を縦に振らなかった。

「それでも許可はできません。あなたの身の安全には代えられない」

「遊びに行くだけで、危険なことなんてしませんから」

「今のあなたには、どこであろうと危険なんですよ」

ともかくダメの一点張りの副会長に、聖さんは膨れて、あたしの腕を掴み揺さぶる。

「環ちゃんも、わからずやの絆先輩に何か言つてよ！」

そんなこと言われても。村人級に非力なモブに、魔王に立ち向かえとか無茶すぎるよ。

「聖さん、事情はあんまりわかんないけど、わがまま言つて副会長困らせるのはやめなよ」

「むう、環ちゃんまで。もう、知らない！」

聖さんは二対一と分が悪いことを悟ったのか、そっぽを向いたかと思うと走り出した。

もしかしてそのまま走り去るのかと思つたが、聖さんは十メートルもいかないうちに速度をゆるめ、数歩歩くごとにこちらをチラチラと振り返る。

あたしと副会長から一定の距離を保ちながら、それを続ける彼女に呆れてしまった。

もしかして、機嫌が悪いアピールをして、こちらが折れるのを待っているのだろうか。

あまりに子供っぽい行動だが、聖さんなのでもはや驚かない。

それよりこの状況になつても、聖さんのご機嫌取りをしない副会長のほうが気になる。

「追わなくていいんですか？」

「……追つてどうするんです？ 言うべきことは言いました。納得できないのは彼女の問題です」
突き放したような答えに思わずぼかんとする。

ゲームではあんなに聖さんにベタ甘だったのに。

意外な副会長の言動に、本当にこれは副会長かとまじまじと見上げていたら、彼と目が合った。

「……なんですか？」

不機嫌そうに睨まれて、「いえ、別に」と視線を外すと、溜息が聞こえる。

「……あなたなら、あの場合どうします？」

副会長からの質問にあたしはますます困惑した。まさかと思いつつ、恐る恐る聞き返す。

「それって、もしかして聖さんのことですか？」

すると副会長は、それ以外に何かあるのか、と言わんばかりの視線をよこした。

「……先ほど、どう言えば機嫌を損ねずに説得できたでしょう？」

とっさに出そうになつたあたしの答えは、「わかるわけがない」だった。

聖さんの思考は宇宙人みたいなものだ。理解不能で機嫌の取り方がわからないのはあたしも同じ。

しかし、副会長相手に考えなしの発言は怖くてできない。

「……えっと、聖さんが怒ってるのは、外出ができないからなので、許可してあげたらいいんじゃない？」

「それができるなら、あなたになんて相談してませんよ」

無理やりひねり出した答えを冷やかな視線で一蹴され、イラッとしたが我慢する。

「俺一人なら都合をつけられるので、出かけられるのですが」

どうやら聖さんの遠出は、今日のように月下騎士を伴えば、可能らしい。

なんてゲームの展開に都合の良い条件なんだろう。

なんとしてもイベントを起こそうという誰かの力が働いているようで、怖い。背筋が寒くなつた気がして腕をさする。

「どうしました？ なんだか、顔色が悪くなつた気がするのですが」

こちらの変調に気付いた副会長の声に、あたしは首を横に振った。

「いえ、なんでも。それより、なんで、副会長は言わなかったんですか？ 自分一人なら、出かけられるって」

そうすれば、二人きりのデートが実現したのでは？

「それは……」

あたしの指摘に顔を暗くする副会長。その表情から、ふとゲームのセリフを思い出す。

「もしかして聖さんと二人きりで出かけて失敗するのが怖いとか……べほっ！」

言い終わる前に、片手で口を塞がれた。両頬に指が食い込んで、痛い痛い！

「……なんですか、それ。そんなわけないじゃないですか」

黒いオーラを放ちながら笑う副会長に、どう考えても凶星だろうと思つたが、そんなこと口にするほどの度胸はない。

「ほ、ほうへふ！ ほうへふよへ！」

必死に首を縦に振つて、同意したことにより、副会長の手が外れる。

急いで副会長から距離を取り、頬を押さえた。

うう、だつてゲームでは副会長自ら聖さんに語つてたんだもん。

『初デートの時、どれほど緊張して、失敗を恐れていたのなんて知らないでしょう』つて。

でも、これベストエンディング後の会話なんだよな。

聖さんに今以上にベタ甘な副会長の笑みを思い出し、その千分の一でもいいからこちらに優しさを向けてくれないかと思う。でないところの会話が終わるまでに、あたしの顔が變形しそうだ。

「まったく。以前から失礼な人だとは思っていましたが、これほどとは。俺を怒らせたいんですか」

「ううう。それは、申し訳ありません。じゃあ、聖さんの誘いを断つた理由つて……」

あたしの再度の問いに副会長は少し躊躇いをみせたが、ポツリと呟いた。

「利音は、月下騎士全員と遊びに行きたいのではありませんか？」

「そんなことを言ってみましたね。でも、無理ですよね？」

「ええ、どう考えても無理なんですよ。ならば、いつそ中途半端なことはせず、許可しないのが利音のためと思つたのですが、まさか、怒つてしまうなんて」

え、ちよつと待て。それが誘いを断つた理由？

そういえば副会長はゲームの中で、聖さんの出すいろんな無理難題に完璧に对应していた。

負けず嫌いな上、本人の基本能力が高いせいで大抵のことはできるからだが、よもや完璧主義をこじらせているとは。

この場合、月下騎士全員にこだわる必要はないのだと副会長に教えてあげれば、話は終わる。

しかし、あたしはそれを伝えるのを躊躇した。

聖さんの相手として、副会長は推奨したくないからだ。

彼のルートには『吸血鬼＋ホリック』中、最悪のエンディングと言われた、学園壊滅エンドへの分岐がある。たとえ二学期になって聖さんとの縁が切れたとしても、そんな事態に陥れば、あたしの命があるとは思えない。

悪いとは思うけど、自分の命には変えられない。

この際、絶対に起こせないイベントにずっと頭を悩ませてもらう。そうすれば、聖さんとの仲も進展しないはず。

副会長、あたしはあなたの味方ではないのだ。

「……そうですね。もう、ここまで来たら、なんとかするしかないんじゃないですか？」

「なんとか、とは？」

「月下騎士全員でお出かけするんですよ」

「だから無理だよ」

「でもそこをなんとかしないと、聖さん、きつと納得しませんよ」

脅すように言えば、副会長の瞳が揺らぐ。

「……本当に、それで利音は機嫌を直してくれるでしょうか？」

「間違いなく、機嫌は直るし、副会長のことも見直すと思いますよ」

本心から答えたのだが、副会長は胡散臭そうな顔をした。

「なんでしょう。あなたが協力的だと、ものすごく嫌な予感しかしないんですけど」

ぎくっ。下心がバレそうになってあたしは慌てて取り繕った。

「ソナコトアリマセンヨ。被害妄想デスヨ」

「そういう片言なところが怪しいんですけど、助言を求めたのは俺ですしね」
まあいいです、と副会長は息を吐く。

「わかりました。そこまで言うなら、考えてみます」

副会長の言葉に内心でガツポーズをしていたら、副会長の目が光った。

「ですが、俺を陥れようというならかの意図が助言に含まれていた場合、それなりの報復は覚悟しておいてくださいね」

ぞくり。微笑みながらも黒いオーラを放つ副会長に魔王の風格を見て、あたしは血の気が引いた。これは判断誤ったかも。だが、今さら撤回はできない。

「むう、二人で仲良く何してるの？」

想像より近い距離で聞こえた聖さんの声に顔を向ければ、彼女はいつの間にかあたしたちのそばに立っていた。

おそらく一人で放置され、寂しくなったのだろう。

子供のようなヒロインの行動に呆れていたら、副会長が聖さんに優しい笑みを向ける。

「別に、普通に話していただけですよ」

「本当ですか？ 随分二人で盛り上がっていたようですけど？」

「そんなことはありません。それより、利音。先ほどの件ですが……」

え、もしかして、なんとかするって宣言する気か？ それともまさか、叶える当てがあるとか？ 展開を読み間違えたのかと、ギクリとしたその時――

「利音ちゃん！」

明るい声が響き、前方から黄土兄弟がやってきた。

「あ、おはよう、統瑠君、翔瑠君」

「おはよー。珍しいね、こんな所でどうしたの？」

話を邪魔されて不機嫌な副会長に気付いているのかいないのか、統瑠は無邪気に聞いてくる。

「うふふ、今日はね、ちよつと気分転換に通学路を変えてみたんだ。統瑠君たちは？」

「ここ、僕たちの寮からの通学路なんだよ」

統瑠の言葉に学内地図を思い浮かべ、確かに途中で月影寮からの道に重なることに気付いた。

攻略対象と遭遇する可能性があるなら、明日からは別ルートを考えたいほうが良さそうだ。

「でも、緑先輩も一緒とかめつずらしーね。まさか、朝からデート？」

統瑠がニヤニヤと茶化せば、聖さんが顔を赤くする。

「え、ええ？ そんなんじゃないよ！」

「からかうのはやめなさい。君たちも事情は聞いているでしょう？」

副会長の極寒ブリザードの視線にも、統瑠は慣れているのか全く動じていない。

「もう、緑先輩ってば相変わらず固いねえ」

「君がやわらかすぎるだけです。大体、多岐さんも一緒なのにデートなわけがないでしょう？」

「……環ちゃん？」

副会長の言葉に、何やら翔瑠が反応してこちらを見たが、あたしは統瑠のほうを警戒する。

先日、妙な警告を受けたばかりだ。去り際のキスの真意もつかめない。少なくとも好意や謝意からではないだろう。とにかく今一番の要注意人物だ。

彼らから距離を取ろうと後退すると、統瑠がつまらなさそうに口をとがらせた。

「そんな警戒しなくていいよ。二度とやらないようにって散々、美香ちゃんに言われたから」

統瑠のうんざりした様子に、天城さんが本当に注意してくれたのだとわかって、あたしは嬉しくなる。

それでも警戒は解かずさらに一步後ろへ下がると、誰かにぶつかった。

驚いて振り返れば、翔瑠が立っている。いつの間に移動したのだろうか。その近さに一瞬身体が強張る。

「か、翔瑠様？」

「……環ちゃん、ちよつとじつとして」

翔瑠はあたしの側頭部を掴むと、そのまま自分の顔を近づけてくる。

鼻先が触れそうな距離に、わけがわからず目を閉じると、こつりと額に硬いものが触れた。

「……ん、熱はなさそう」

その一言で、どうやら体温を測られたのだとわかった。

高校生にもなって、なんつう測り方するんだよ、こいつは！